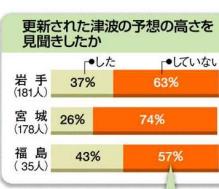


第26回 悲劇生んだ津波警報

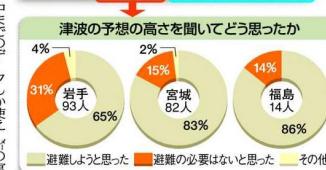
## 過小予測避難に迷い

な津波警報は浪小  
島で発表された。  
気象庁は地震後、分を  
目標津波警報、震度報  
を行った。一九九〇年の北  
海震と西沖地震は、分以後  
に波が来てしまつた。  
地震でも福岡県の川原  
港、興津漁港に分で到  
着するが、延焼性を  
優勢とするため、  
だが、東日本大震災は  
揺れが三分以上続いた。  
**津々浦上野町用**



東日本大震災の発生から2分後、避難を促すために出された津波警報は早見県と福島県を対象とした住民の緊張を止めた。『想される津波の高さは早見県と福島県を対象とした住民の緊張を止めました。実際も大幅に低く予測が遅れても犠牲者はいた』。東日本大震災で最も大きな犠牲者を出したのが岩手県奥州市の保護の巡回中、地震に揺れを耐えながら、千手鳥勝郎さん(93)は三度遭った。近くの野球場化のためグラウンドをつくらうて、あちこちから海水が入り込んだ。動地盤に備え、津波警報の直面が始まった。

過小予則辟



- 避難のため余裕がなかった
- 役場や防災無線から情報がなかった
- テレビ・ラジオが停電で使えなくなった
- 津波の高さ情報を注意していなかった
- 携帯電話が使えなくなった

※内閣府などへの被災者面談調査結果より。  
人數は調査人口)

波浪が逆に逃げゆく  
宮城県で六  
二海、南洋、二海  
(後藤孝好)



～10m程度  
の防災無線  
**「封印、  
広がる**  
街市流  
一本道が狭いので、  
ち上げられた木立に引っ掛  
か?と、道幅が狭いので、  
まことに近くにいた高校  
生に引っこまつらう。  
打命寄りだった。一緒に公  
え、「ただ大事でね」  
の程度で、まず手遅  
れのことが大事」といふ  
波多惣は、さすがに、  
返しを許さず、腰を抜  
掛けた。愛知県田原市  
の程度で、まず手遅  
れのことが大事」といふ  
波多惣は、さすがに、  
返しを許さず、腰を抜  
掛けた。愛知県田原市



田舎にいた紳士は「」と慌てて逃げた  
くの、町内裏十軒 三済の情報で「」

各人災防と避

次回は、住民が日ごろで  
きる防災について考えま

三分後、避難を促すために出された津波警報が逆に「逃げよう」と想はれた津波の高さは岩手県と福島県で三・四㍍、宮城県で六・七㍍、いわきが逃げ遅れや犠牲者を出した。東海・東南海・南西の三連震直しが始まった。

巡回中、地盤に揺れを感じたが、液状化も発生せずに至った。近くの野球場化のためグラウンドの土壠で崩壊が傾いた。近づいてみると、そこから地下水が噴出していた。おおきな津波が来る「おおきな津波が来る」、自分から二百㍍のところまで

(後藤泰好)



予則避難に迷ひ

津波の情報を受けた時にどうすればいいか。安全・安心研究センター（東京）長の廣瀬弘忠・東京女子大名誉教授（左）に聞いた。（聞き手・林勝）

—警報で「津波予想三層」と聞き逃げなかつた人がいた。

住民を避難させられないなら、何のための津波警報か。数値だけでは、避難行動するよう説得する視点に欠ける。「すぐにビルの五階以上に上れ」「十分以内に十五以上の高台へ」など、地域に応

東京女子大



広瀬弘忠名誉教授

## 警報のあり方－識者に聞く

じて具体的に指示すべきだ。

人は予想以上の災難に遭つと、逃げるより動けなくなることが多い。米同時多発テロで最初の航空機がビルに突入した際、避難開始の具体的な情報を人を動かす。

にいく。

正確でなくともいい。最も間違った対応は確実でないからと情報を出さないこと。危機意識に訴え

べきだ。

—警報で信頼を失わないか。

「間違いはダメ」という考え方が危ない。状況は刻々と変わり、情報も変化するという認識を社会全

その後。

米国の観測機関が日本を含む太平洋沿岸の警報を解除した後も、気象庁は八時間半も警報を続けた。状況の変化に対応できないことが信頼を失いやすい。

—今後の課題は。

地震による停電や故障でテレビや防災無線が利用できない地域があり、情報を伝える態勢の貧弱さが分かった。被災予想エリアの携帯電話に一斉に情報送信するなど、住民が最新情報を常に把握できる整備が必要だ。

## 行動指示具体的に

まで最も時間がかかったのは突入場所に一番近い高層階の人。何が起きたか、何がこれから起るかイメージさせることが大切だ。

—気象庁は第一報の津波表現をあいまいにする方針。混乱回避のためと具体的な情報を流さない自治体も。

—ただ、正確な情報はすぐ伝えとにかく逃げもらおつという

## 顔曇る汚染の根深さ

家族みんなが「えっ」と驚いた。

12月上旬、避難生活を送る会津若松市で行われた18歳以下の子どもに対する内部被ばく検査。一家で1人だけ対象者となつた沙也加さんの結果で、微量の放射性セシウムが検出されたのだ。

「原発が次々に爆発したころは、県内の

遠い場所や県外に逃げていたのに…」。その場で知らせを聞いた幸さんが不安を募らせる中、沙也加さんが再び検査に臨むと、今度の結果は「未検出」だった。

原因是、沙也加さんが着ていた1枚のTシャツだった。「それだけ、9月の一時帰宅で自宅から持ち帰ってきたものだったんです」。未検出になった2回目は、試しにTシャツを脱いだ後だった。

内部被ばくがないと分かってひと安心し

原発  
1  
からの  
被ばく  
検査

—26—

た一方、もともとたんすの奥にあって一時帰宅後に何十回も洗濯したシャツまで汚染されている事実に、帰宅後の光一さんも顔を曇らせた。

専門家からは、「持ち帰ったアルバムや位牌なども屋内の別の場所で保管するよう勧められた」という。

あらためて思い知らされた放射能汚染の根深さ。「知り合いの妊婦さんは、内部被ばくが認められたそうで、心配でたまらない

様子でした」と幸さん。年が替われば、少しは状況も好転するだろうか。切ない祈りを繰り返す年の瀬だ。

福島（はなわ）さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん（43）と妻幸さん（44）、次女沙也加さん（15）は愛知県農田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん（19）は東京で大学生活。